

養護実習における養護実習生の学びの実態 —養護実習事後指導における質問紙調査から—

八重樫節子・小貫麻美

東京福祉大学 教育学部(伊勢崎キャンパス)
〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町 2020-1
(2012年1月24日受付、2012年3月1日受理)

抄録: 本研究の目的は、養護実習における学生の学びの実態を明らかにし、カリキュラムのさらなる充実を目指すことである。本研究では、養護実習生を対象に質問紙調査を実施した結果、学生は実習中に養護教諭としての職業的技能の獲得に加え、児童生徒や保護者、教職員に対するコミュニケーションの必要性和、コミュニケーション能力を高める必要性を感じていることが明らかとなった。本研究によって、養護実習事前指導においては、具体的な場面に応じたコミュニケーション技術の習得を目指す必要性が示唆された。

(別刷請求先: 八重樫節子)

キーワード: 養護実習、事前指導、学生の学びの実態

緒言

本大学教育学部としての養護教諭養成課程は、本年度で5年目を迎えた。より資質の高い養護教諭の養成を目指し、学校現場で必要とされる養護教諭の独自性・専門性の養成において養護教諭養成大学へ課せられた課題は大きい。中でも、教員養成のための授業・カリキュラムの重要性は高く、多くの教員養成大学で検討が行われている(本田ら, 2011; 中田ら, 2011; 廣原・中村, 2006; 盛ら, 1998)。

本大学においても、養護実習巡回訪問等で学生の様子や学生の抱える課題を捉え、授業改善に向けて検討を行ってきた。しかし、学生によりとらえ方に違いが生じ、十分学生の実態を把握するに至らず、学生個々の要望や指導が徹底しきれないという問題があった。

これらの問題に対し、本研究は、養護実習事後指導において、学生に養護実習の振り返りを記述式質問紙にて実施した。質問紙調査は、先行研究を参考(今井, 2004)にして、独自の4つの記述項目を加えて作成した。そして、質問紙調査によって得られた実習振り返りをカテゴリー分類し、そこから見える学生の実態について検討を行った。

研究対象と方法

1. 対象者

調査対象者は、2010(平成22)年度の養護実習実施者、4年生82名(男子3名、女子79名)である。

2. 調査方法

養護実習事後指導の授業内において、養護実習の振り返りとして、受講者82名を対象に自由記述の質問紙調査への回答を求めた。質問紙調査は、「実習中に難しかったこと、気をつけたことについて述べてください。」とし、①言葉かけ、②学習すべきこと、③心構え、④気をつけること、の4つの設問について記述を求めた。

3. 個人情報への配慮

質問紙による調査の実施にあたり、目的と利用についての説明を十分に行った。結果の分析にあたっては、個人情報特定されないように配慮を行った。その上で、了解を得られた学生から質問紙に対する回答の提出を受けた。

4. 分析方法

研究内容の分析には、Berelsonの内容分析の手法を用いた。

各設問に記述した内容から、意味のある文章を記録単位として抽出した。抽出された記録単位は、意味内容の類似性に従って分類し、カテゴリーを形成した。そのカテゴリーの内容を忠実に反映した表現を用いて命名した。分類にあたっては、独自性を持たないために複数で分類し、カテゴリー形成を行った。各設問に対し有効回答数が異なるため、結果にて有効回答数、および有効回答率を記述した。

結果

養護実習を実施した82名全員から回答を得ることができた。

1. 「言葉かけ」に関する記述

言葉かけにおけるコミュニケーションの取り方で難しかったことや、よくできたこと等の感想・意見の自由記述で65の有効回答(有効回答率79%)が得られ、それらは6つのカテゴリーに分類された。これを表1に示す。

「児童生徒に応じた言葉かけ」については、「丁寧な言葉、子どもに分かる言葉を使うようにした」や「学年に応じて、使う言葉、話すペースを考える」などの相手の立場を考慮した内容とした。「言葉づかい」は、「敬語なのか、ため口でいいのか迷った」や「学年が上がるにつれて態度や言葉づかいに違いがあったので、その人にあった対応が必要であると感じた」などの、教師としての言葉づかいに関する内容とした。「あいさつ」は、「あいさつを積極的にした」や「学校内のどこでも児童生徒に会ったらあいさつをした。その成果か、すぐに打ち解けることができた」などの、あいさつの重要性に関する内容とした。「言葉かけに対する姿勢」は、「なるべく積極的に言葉かけをするべきだと感じた」や「名前を覚える、『その子を知る』ことを心掛ける、笑顔を絶やさない」などの児童生徒への言葉かけへの姿勢に関する内容とした。「指導の言葉かけ」は、「教室に戻さねばいけない時

表1. 言葉かけに関する記述 (N=65)

カテゴリー	サブカテゴリー数(%)
言葉かけに対する姿勢	9 (14%)
指導の言葉かけと結果	7 (11%)
(教師としての)言葉づかい	16 (24%)
児童生徒に応じた言葉かけ	16 (25%)
要配慮児童生徒への言葉かけ	7 (11%)
あいさつ	10 (15%)

は、いかに児童生徒をやる気にさせるかが勝負だと学んだ」や「自分が言った一言で児童生徒が元気になっていく姿が見られたときはうれしかった」などの児童生徒への指導や、指導の結果に関する内容とした。「要配慮児童生徒への言葉かけ」は、「特別支援学級の児童生徒への話しかけかたをほめられました」や「自分から言葉を発しない児童生徒への言葉かけが難しかった」などの、配慮が必要な児童生徒への言葉かけに関する内容とした。

下位のカテゴリーの割合を比較すると、大きい順に「児童生徒に応じた言葉かけ」(25%)、「言葉づかい」(24%)、「あいさつ」(15%)、「言葉かけに対する姿勢」(14%)、「指導の言葉かけ」(11%)、「要配慮児童生徒への言葉かけ」(11%)であった。

2. 「学習しておいたほうがよいもの」に関する記述

後輩に向けてのアドバイスとして、「学習しておいたほうがよいもの」についての自由記述で、64の有効回答が得られ(有効回答率78%)、それらは4つのカテゴリーに分類された。これを表2に示す。

「救急処置」は、「救急法(特に、切り傷、すり傷、ねんざ、打ち身)」や「AEDの使い方」、「基本的な応急処置」などの、主としてケガや病気の処置に関する内容であった。「健康診断・行事」は「健康診断の進め方」や「身体測定や目や耳などの検査に使う用具の使い方」、「実習時期に学校行事は何かがあるか」などの、実習期間中の学校の行事、各行事における職務の配慮の必要性に関する内容であった。「養護としてのサービス以外」は、「学校や地域の特性など」や「発達障害についての基本的知識」などの、実習をこなすだけでなく、教員として配慮すべきことに関する内容であった。「基礎知識」は、「専門用語をきちんと理解しておく」と良い」や「養護教諭の学校での役割や、来室した児童生徒への対応、感染症など病気について」などの、実習に臨む上での準備に関する内容であった。

下位のカテゴリーの割合を比較すると、大きい順に「救急処置」(52%)、「健康診断・行事」(23%)、「養護としてのサービス以外」(14%)「基礎知識」(11%)であった。

表2. 「学習すべきこと」に関する記述 (N=64)

カテゴリー	サブカテゴリー数(%)
基礎知識	7 (11%)
養護としてのサービス以外の事項	9 (14%)
健康診断・行事	15 (23%)
救急処置	33 (52%)

3. 「心構え」に関する記述

後輩に向けてのアドバイスとして、「心構え」についての自由記述で62の有効回答(有効回答率75%)が得られ、それらは7つのカテゴリーに分類された。これを表3に示す。

「姿勢・態度」は、「何でも素直に吸収する」や「実習生としての自覚を持ち、学ぶ意欲を持つ」といった、実習に対する取り組みの姿勢や態度に関する内容であった。「目標設定」は、「何を学びたいかきちんと目標を持つ」や「何を学ぼうとしているか、しっかり目標を立てて養護教諭に伝える」などの、実習の目的・目標の明確化に関する内容であった。「積極性」は、「積極的に学ぶ姿勢を持つこと」や「やりたいこと、知りたいこと、見たいものはリストアップしておく」などの、実習への積極的な取り組みに関する内容であった。「自覚」は、「教師という自覚」や「児童生徒の前では先生であり、先生方の前では学生であるという立場を踏まえ、行動すること」などの、教員としての自覚に関する内容であった。「具体的な対応」は、「事前に知識を入れたり、子どもたちの名前や特性を憶えたりする」や「あいさつは本当に大切で、笑顔で子どもたちと接すること」などの、実習を円滑に進めるための具体的な方策に関する内容であった。「学習意欲」は、「意欲を持って取り組む、常に学び、質問する」や「児童生徒と関われる時間は特に大切に貴重に使うように心掛ける」などの、実習に対する学習意欲に関する内容であった。「生活習慣」は「忙しいので、体調管理をしっかりした上で、取り組む」のように、学生と教員の生活習慣のズレや、それに関する注意などの内容であった。

下位のカテゴリーの割合を比較すると、大きい順に「姿勢・態度」(22%)、「目標設定」(18%)、「積極性」(18%)、「自覚」(15%)、「具体的な対応」(11%)、「学習意欲」(11%)、「生活習慣」(5%)であった。

4. 「気をつけること」に関する記述

後輩に向けてのアドバイスとして、「気をつけること」

表3. 「心構え」に関する記述 (N=62)

カテゴリー	サブカテゴリー数(%)
姿勢・態度	14 (22%)
具体的な対応	7 (11%)
学習意欲	7 (11%)
自覚	9 (15%)
目標設定	11 (18%)
積極性	11 (18%)
生活習慣	3 (5%)

について、自由記述で65の有効回答、(有効回答率79%)の結果、9つのカテゴリーに分類された。これを表4に示す。

「言葉づかい」は、「言葉づかい」や「児童生徒への言葉遣い・対応」などに関わる内容であった。「教師としての自覚」は、「保護者との接し方」や「個人情報の取り扱い」といったように、教員として求められる思考や行動についての内容であった。「あいさつ」は、「あいさつは大きい声ではきはきと」や「あいさつはしっかり」などの、あいさつを重要視する内容であった。「児童生徒との関わり」は、「児童生徒との距離感」や「児童生徒との関わり方」などの、教員として児童生徒との関わり方を挙げている内容であった。「姿勢」は、「時間を守ることだと思ふ」や「基本的な礼節、態度」などの、社会人としてのマナーや礼節に関する内容であった。「実習生としての心構え」は、「一人で勝手な判断をしない」や「先生方は、時間を割いてくれて指導してくれているという意識をもつこと」などの、指導して下さる先生方や、指導を受ける立場としての内容であった。「身だしなみ」は、「服装」、「態度」などの、外見的な変化に関する内容であり、「処置」は「骨折時や応急処置など学校の種別によって起こりうるケガの手当てについてしっかり覚えておくこと」といった、処置に関する内容であった。「目標」は「『ただ見ているだけ』の実習にならないよう、自分から積極的に動くべき」といったように、実習目標の明確化についての内容であった。

これらの下位のカテゴリーの割合を比較すると、大きい順に「言葉づかい」(24%)、「教師としての自覚」(22%)、「あいさつ」(15%)、「児童生徒との関わり」(9%)、「姿勢」(9%)、「実習生としての心構え」(8%)、「身だしなみ」(5%)、「処置」(5%)、「目標」(3%)であった。

表4. 「気をつけること」に関する記述 (N=65)

カテゴリー	サブカテゴリー数(%)
言葉づかい	16 (24%)
あいさつ	10 (15%)
身だしなみ	3 (5%)
教師としての自覚	14 (22%)
児童生徒との関わり	6 (9%)
実習生としての心構え	5 (8%)
目標	2 (3%)
姿勢・態度	6 (9%)
処置	3 (5%)

考察

1. 「言葉かけ」に関する記述に関して

「言葉かけ」に関する記述を分類した結果をみると、「児童生徒に応じた言葉かけ」や「言葉づかい」では、コミュニケーションの取り方で難しかった経験や考えについての記述が分類されていた。例えば、「丁寧な言葉、子どもに分かる言葉を使うようにした」、「学年に応じて、使う言葉、話すペースを考える」、「敬語なのかため口でいいのか迷った」、「学年が上がるにつれて態度や言葉づかいに違いがあったので、その人にあった対応が必要であると感じた」、「自分から言葉を発しない児童生徒への言葉かけが難しかったです」などの、相手の立場を考慮した内容や言葉づかい、配慮が必要な児童生徒への言葉かけをすることを、養護実習生はむずかしいと捉えている傾向があることが分かった。

「あいさつ」、「言葉かけに対する姿勢」について、「学校内のどこでも児童生徒に会ったらあいさつをした、その成果か、すぐに打ち解けることができた」、「なるべく積極的に言葉かけをするべきだと感じた」、「名前を覚える、『その子を知る』ことを心掛ける、笑顔を絶やさない」など、児童生徒へのあいさつや言葉かけに対する姿勢の重要性について体験を通して学んだことが語られた。

また、「教室に戻さねばいけない時は、いかに児童生徒をヤル気にさせるかが勝負だと学んだ」や「自分が言った一言で児童生徒が元気になっていく姿が見られたときはうれしかった」などの児童生徒への言葉かけが、指導として効果的に作用するという経験を、児童生徒との関わりによって「言葉かけ」の重要性を学んでいることが確認された。

以上のことから、「言葉かけ」によるコミュニケーションの取り方に関しては、多くの学びを実習生は得ていることが分かった。「児童生徒に応じた言葉かけ」や「言葉づかい」は、教員を意識した上での児童生徒への接し方であり、普段学生である自分を正し、教師として振舞うことに対する注意の表れであり、半数の学生が言葉かけを強く意識していた。また、「あいさつ」や「言葉かけに対する姿勢」は、あいさつというツールを使って、児童生徒と積極的にコミュニケーションをとろうという姿勢の表れであり、全体の約3割が言葉かけの中で意識していた。そして、「指導の言葉かけ」や「要配慮児童生徒への言葉かけ」は、教師として児童生徒に何ができるか、何を配慮すべきかを考慮したうえで言葉かけを捉えていると考えられる。この教師としての振舞い方、考え方に関しては、全体の2割強が記述をしていた。この記述から、実習生として教師を捉え、

振舞うのではなく、一教師として物事を考えていることが確認された。Furling et al. (1977)は、教育実習生は実習の始まりでは「教師として振舞う(acting like a teacher)」傾向が強いが、次第に「教師のように考える(thinking like a teacher)」ようになることが重要であることを指摘している。本調査においては、2割強の実習生が「教師のように考える」ようになっており、養護実習が養護教諭養成に果たす役割は非常に大きいことが改めて確認された。

2. 「学習すべきこと」に関する記述に関して

後輩に向けてのアドバイスとして「学習しておいたほうがよいもの」として「救急処置」、「健康診断・行事」、「養護としてのサービス以外」、「基礎知識」であることが分かった。

養護教諭としての日常業務である「救急処置」を挙げた学生が半数を占め、実習生が養護教諭としての業務の主として「救急処置」を重要視している様子が伺える。また、2割強の学生が「健康診断・行事」を挙げ、学校行事という学校現場特有の予定への対応を学生が重要視している様子が伺える。また、15%の学生は地域における学校の役割や、その学校の一員としてどのように様々な児童生徒にかかわっていくかなどの「養護としてのサービス以外」を挙げていた。また、1割程度の学生は、実習に臨む学生として必要な「基礎知識」をあげており、実習に対して自分の準備が足りなかったという反省が垣間見えた。松嶋(2003)の調査結果でも、「ケアに対して自信が持てない」や「最新の医学・看護情報の不足」などを現職の養護教諭が感じていることが報告されている。「養成課程の違いや養護教諭としての未熟さが児童生徒の訴えに対する判断やアレルギーへの対応などの専門性の弱さに繋がっている」ことを指摘している。本調査においても、処置に対する基礎知識、準備不足による自信の未熟さを実習生が感じていることが確認され、実習生が「養護教諭として考える」ように成長していることが推察される。

3. 「心構え」に関する記述に関して

後輩に向けてのアドバイスとして、「心構え」について、「姿勢・態度」、「目標設定」、「積極性」、「自覚」、「具体的な対応」、「学習意欲」、「生活習慣」の7つを指摘していることが分かった。

これら7つの学生が捉えた実習への心構えは、「実習生としての資質」と、「個人的留意」に大別できると考える。「実習に臨む実習生としての資質」に関することには、「姿勢・態度」や「目標設定」、「積極性」、「学習意欲」、「具体的な対応」が含まれると考えられる。養護実習においては「学習意欲」もち、明確な「目標設定」をし、「積極的」な「姿勢・態度」で

臨むことが実習生として重要であり、そのために「具体的な対応」を通じて、積極的に実習に取り組む態度が求められる、と多くの実習生が認識していることが分かった。

一方、「個人的留意」には、「自覚」と「生活習慣」の2つが含まれると考えられる。普段、学生生活を送っている立場から、教師としての生活を送る養護実習に臨むに当たっては、教師としての「自覚」を持ち、「生活習慣」を正す必要性がある、と認識している学生がいることが分かった。この結果からも、養護実習中に「養護教諭として考える」ようになり、自信の未熟さに対する留意や具体的な方策を提案していることが確認された。

4. 「気をつけること」に関する記述に関して

後輩に向けてのアドバイスとして、「気をつけること」について、「言葉づかい」、「教師としての自覚」、「あいさつ」、「生徒との関わり」、「姿勢」、「実習生としての心構え」、「身だしなみ」、「処置」、「目標」を指摘していることが分かった。これらの9つカテゴリーは、さらに「社会人としての心がけ」、「教師としての心がけ」、「実習生としての心がけ」の3つに大別できる。「社会人としての心がけ」には、「あいさつ」と「身だしなみ」とされ、社会人としてきちんとした「身だしなみ」と「あいさつ」が学校現場でも求められることが分かった。

「教師としての心がけ」には「言葉づかい」、「教師としての自覚」、「生徒との関わり」、「処置」が分類された。このことから、教師としては、「教師としての自覚」をもち、「生徒との関わり」において「言葉づかい」に留意し、日常業務の主務の一つである「処置」を迅速に行っていくことが求められると、実習生が感じ取ってきたことが分かった。

そして、「実習生としての心がけ」には、「姿勢」、「実習生としての心構え」、「目標」が分類される。このことから、実習生としては「目標」を明確化し、「実習生としての心構え」や実習生としての「姿勢」を形成して、実習に臨むことが必要であると捉えていたことが分かった。

以上の「言葉かけ」「学習すべきこと」「心構え」「気をつけること」の4つの設問に対する、学生の回答を、それぞれカテゴリー分類し、それぞれから見える学生の実態を示した。これらの4つの設問を通じて、養護実習における学生の学びについて総合的に考察を行っていく。

今回の質問紙調査の結果を概観すると、養護実習により実習生は「養護教諭として考える」ようになり、養護教諭の主な仕事の一つである救護処置の知識や技術の獲得はもちろんのこと、児童生徒や保護者、教職員に対するコミュニケーションの技術や能力の獲得や必要性を重要視している

ことが確認された。

ここで注目すべきことは、コミュニケーションについてである。相良(2009)は、児童生徒と適切なコミュニケーションを行うために困難を感じている教育実習生が多いことを報告している。本調査における養護実習生においても、コミュニケーションは重視されており、「言葉かけ」における回答にも示されたように、『養護教諭はその時々言葉かけの対象によって、適切な言葉かけを行う必要がある』と感じていることが確認された。つまり、養護実習生は、他の教育実習生と同じようにコミュニケーションの重要性を感じており、また養護教諭特有の言葉かけへの配慮の必要性を感じていた。

養護教諭は児童生徒にとっては、他の教科を教える教師とは違った立場にいる教師として認識されていることが多く、それゆえに児童生徒が悩みごとにも相談しやすい傾向にある。また、他の教師達とも違った視点で、児童生徒のことを考えられる重要な立場であり、児童生徒からの意見を他の教師へ伝えたり、教師からの生徒に対する要望なども伝えたりする役割もある。そのため、言葉かけは大切であるという意見になったと考えられる。

このように児童生徒と他の教師をつなぐ重要なパイプの役割を担うことになるため、コミュニケーション能力を獲得し、発揮することは結び付けをより円滑にする役割や関係性を築く助けとなる。コミュニケーション能力は日常生活を送る中でも、円滑に関係性を保つためには頻繁に使われる技能であるため、あえて授業などで指導する必要はないと考えられがちである。しかし、現代の大学生は、携帯電話やインターネットの普及により、友人と友好関係を築いたり、直接コミュニケーションを取ったりする対面コミュニケーション能力の不足(相良, 2010)が指摘されている。また、児童生徒間の友好関係が希薄化し、学校教育の問題が複雑化している今日の学校現場においては、このあたりまえのコミュニケーション力こそが重要であり、十分に発揮して行くことが求められている。そのためには、コミュニケーションのあり方について、さらにきめ細かな対応を学ばせ、養成していくことが急務と言える。

コミュニケーションの必要性を指摘した研究は取り組まれているものの、授業場面における児童と教師のコミュニケーション(江村・大久保, 2011)や特別支援を必要とする児童生徒へのコミュニケーション(茂木, 2011)などの、場面や対象が指定された研究が多い。また、コミュニケーション能力の育成に関しても、対象が小学校教諭に限定されており(板良敷ら, 2010)、教授場面を有せず、多様な場面を経験する養護教諭を目指す学生にとっては、コミュニケーション力育成の研究は、十分とはいえない。

今後は、カリキュラム見直しとして、どのような場面に
対し、どう対応していくかについて、保健室来室時の対応
などの具体的な場面提示や、ロールプレイなどを取り入れ
て、知識・技能とともに、コミュニケーション力の習得、向
上を含めた養護事前指導を行っていきことが求められる。
今後も引き続き、養護教諭養成について、学生からの意見、
実習校からの要望、意見などを取り入れ、より良い養護教
諭養成のために研究を進め、具体的な手立てにつなげてい
きたいと考えている。

結論

実習の振り返りなどの学生の自己評価は、学生の視点に
よる養護実習における学び、問題点を明らかとする。また、
指導者は、学生の視点を得ることで、指導者が意図してい
る養護実習における学びと、学生自身の実習の実態との差
異を確認することができる。このように、学生の自己評価
から、指導者自身が養護実習の指導内容を検討していくこ
とは、養護教諭養成カリキュラム見直しに関して、重要な
要素となる。

養護教諭養成カリキュラムの見直しに関し、具体的内
容として知識・技術だけでなく、具体的な場面に応じた
コミュニケーション技術の習得が必要であることを示唆
している。

文献

江村早紀・大久保智生(2011)：授業場面における児童と教
師のコミュニケーションと児童の授業への動機づけお
よび学級への適応との関連。香川大学教育実践総合研
究 **22**, 177-183.

Furlog, J. (1977)：Commentary. In: Allsop, T. and Ben-
son, A. (Ed.), *Mentoring for Science Teachers*, Open
University Press, Berkshire, p116.

廣原紀恵・中村朋子(2006)：養護教諭養成課程の学生によ
る養護教諭の職務内容に関する認識と養護教諭像。茨
城大学教育学部紀要, 教育科学 **55**, 305-314.

本田優子・岡田加奈子・天野敦子ら(2011)：養護教諭の児童
生徒との関わりから見えたケアと執務遂行上の課題。
高知大学看護学会誌 **5**, 65-69.

今井洋子(2004)：養護実習のあり方に関する研究(2)－養
護実習の実習校における評価および学生の自己評価を
もとに－。北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀
要『生涯学習研究と実践』**6**, 221-236.

板良敷 敏・小笠原 侃・富田福代ら(2010)：小学校教師に
求められる資質能力－小学校本調査の結果分析－。教
育総合研究叢書 **3**, 41-74.

松嶋紀子・岡田加奈子・本田優子ら(2003)：教育学部養護教
諭養成の臨床実習に対する卒業生の学習ニーズ。学校
保健研究 **45**, 102-120.

盛 昭子・堀内久美子・大谷尚子(1998)：養護実習のあり方
に関する研究第2報－学生の実習直後の自己評価(特
集 養護実習)－。日本養護教育学会誌 **1**, 24-35.

茂木俊彦(2011)：障害のある子どもの理解と教育指導。障
害者問題研究 **39**, 2-9.

中田晋介・青山之典・古賀一博ら(2011)：教育実習の在り方
について－小学校教員養成における教育実習指導の
充実について－。広島大学 学部・付属学校共同研究機
構研究紀要 **39**, 87-92.

相良麻里(2009)：教育実習に関する効果的な事前・事後指
導の検討：実践的指導力の基礎(1)。東京家政大学研
究紀要 **49**, 21-26.

相良麻里(2010)：教育実習に関する効果的な事前・事後指
導の検討：実践的指導力の基礎(2)。東京家政大学博物
館紀要 **15**, 1-10.

Reality of Nursing (*Yogo*) Practice in Nursing Trainees Learning: from Post-training Survey of Nursing Leadership

Setsuko YAEGASHI and Asami ONUKI

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this study was to clarify the actual learning of students in nursing (*yogo*) practice. This study was conducted a survey of nursing trainees. The results of this survey showed that, as a nursing teacher, the nursing trainees felt the need to improve the skills of communication with pupils, parents, and teachers in addition to the acquisition of occupational skills in practice. The present results suggest that the advanced practice nursing teacher is required an effort toward improvement of the communication skills in the particular situation.

(Reprint request should be sent to S. Yaegashi)

Key words : Nursing (*yogo*) practice, Prior guidance, The learning of student

